

佳作

愛犬ラッキーのこと

熊本県 熊本県立天草高等学校二年 片山 大智

令和七年七月二十一日、享年十才。気管支拡張の薬を飲み始めて二週間目のことだった。突然の別れは言葉では理解したはずなのに何が起こっているのか心が追いつかなかった。周囲に促され、段々と冷たくなっていくラッキーの頭を数回なでた。でもその後は近寄ることも直視することも出来なくなった。夜、ベッドの中で独りで泣いた。

ラッキーは私が小学一年生の秋に迎えたオスの白黒ロングコートチワワだ。私には発達障害「ASD」「ADHD」がある。ペットを飼うことは情操教育や感覚過敏改善によいということで時間をかけて気持ちと環境を整え迎えた。一人っ子の私にはまるで弟ができたようで嬉しくてサークルフェンス内のラッキーの前で何度も何度もぴよんぴよん跳ねたり、くるくる回ったりした。ラッキーはただ不思議そうにじっと私を見つめていた。次の日になると、自分からサークルフェンスの外に出てきて私と一緒にぴよんぴよん跳ねたり、くるくる回ったりした。細い、小さなしっぽがぴよぴよこ動いていた。

かったが私が高学年になる頃にはラッキーと一緒にいれば数時間、留守番も出来るようになった。ただ傍にいてくれるだけでも心強かった。

ラッキーは年に数回ある予防接種の注射をされても声をあげて鳴くことはなかった。なのに私が叱られたり悲しくて泣いているとすぐに駆け寄り、一緒に声をあげて鳴いた。私が食事をしている時は食べていないのに舌をペロペロ動かしていた。朝、私が脱ぎ捨てたパジャマに包まって、もうひと眠りするのが好きだった。人懐っこいし、俊敏だし、甘えっこですぐ膝に乗ってくる。遊んでほしい時には自分のおもちゃを啣えて持ってくる。おもちゃを手に乗せてくる。遊んであげるとすぐに疲れて飽きてしまう。散歩は好きだが外を歩くのは苦手なのでいつも抱っこ。一緒に出掛けたくって後追いで……最後の日も後追いでたね。

私はいつもラッキーに助けられたし守られていた。たたくさんの愛情や思い出をもらった。犬は幼い子供に対し「守らねば」という意識が潜在的に備わっていると聞く。ラッキーにとって私は「守らねば」という存在だったのかも知れない。

今でも玄関を開けたら「お帰り」って出迎えてくれるのではと思ってしまう。もう、呼んでも来てくれない。これから先も何かにつけラッキーを思い出すことだろう。寂しい時、悲しい時、いつも傍にいてくれた。でもなぜか今でも傍にいてくれるような気配もある。心配し

ラッキーという名前は私が見つけた。当時、私の口癖が「ラッキー、超ラッキー」だった。「いいことがいっぱいありますように」と願いを込めた。ラッキーは教えてもないのにお手やお座りが出来た。伏せや待てまでも初めのうちこそ失敗はあったもののトイレの粗相は少なかった。ラッキーは自分のおもちゃ以外では遊ばなかった。一度だけ、私が大切にしていたニシキアナゴのぬいぐるみの目をかじったことがあった。私がショックで大泣きして以降、どんなぬいぐるみを目の前に置いてもなめたり噛んだりすることがなくなった。十年もの間、最初に与えた三つのおもちゃでしか遊ばず、ボロボロになるまで使っていた。時々、日光に当たったり洗ったりすると早く返してと言わんばかりに飛びついてきた。

私が小学二年生になった四月十四日、熊本地震が起こった。震源地から離れていたため、揺れはさほどなかったのだが携帯電話から聞こえてきた、けたたましい警報音に驚いてパニックになってしまった。もともと独りでトイレやお風呂に入れなかった私は更に分離不安症が加速してしまい、母から一時も離れることが出来なくなってしまった。しばらくの間は母も付き添ってくれたが母がトイレに入る時もドアを閉めることが出来ず、就寝も一緒に夜九時と負担を強いてしまった。そんな中、母の提案で少しずつラッキーを代用するようになった。ラッキーは嫌がることなく指定された位置で伏せして私に付き合ってくれた。分離不安症の克服までには一年以上もか

ているのかな。この世に奇跡があるのなら私にとってラッキーとの出会いこそが奇跡だった。私はラッキーと共に幸せな時間を過ごした。忘れたくない大切な思い出。私は人の成長には愛情が欠かせないと思っている。それは人から与えられるだけではなく動物からも与えられるものだと思う。

ラッキー、聞こえるかな。たたくさんの思い出や経験、そして愛情をありがとう。これからの私はもう少し自立して強くなるからね。

ラッキーのいない新しい生活が始まった。